



二 街を創る

その時、

「ありがとうございます、神様」

「同じく、ありがとうございます、神様」

と、誰かが、続けざまに僕に話し掛けてきた。それも天井に届くようなかん高い声と床から響いてくるような低い声だ。

周りを見渡す。誰もいない。パパやママは相変わらず、新聞や雑誌の虜だ。僕はお腹がすきすぎて、妄想の音が聞こえてきたのだと思い、ぺちゃんこのお腹をさすった。まだ、大丈夫。背なかとはいっついていない。もちろん、これまでにだってお腹と背中がひっついたことはない。やっぱり気のせいだ。

次に、オレンジ色の人とグリーン色の人に住む家を、今、自分が住んでいる家を想像して描いた。二階建ての四LDKだ。中流階級の典型的な家だ。もちろん、僕には何が上流で、何が中流で、何が下流なのかはわからない。新聞やテレビのニュースからの受け売りの言葉だ。

右から左に流れてくる情報に遅れまいと、同じ言葉を口パクでしゃべっているふりをしているだけだ。僕が思う中流って、多分、お金が世間一般に比べて、普通並みに駐留しているからだろう。

それは、どこか山の奥で、大きな金の塊が発掘され、上流にはたくさん止まり、中流にはぼちぼち止まり、下流には全く流れてこない、ということなのだろう。うまい。思わず、自分で拍手をする。パチ、パチ、パチ。でも、普通って何？こんな自問自答を繰り返していると、再び、さっきの二つの声がした。

「ありがとうございます、神様。でも、あたしは、どうせなら中流じゃなく、もう少し広い家と一緒に住む家族が欲しいわ」

「そうですね、それは私も同じです。普通の家じゃなくて、大きな家、大流の家が欲しいです」

誰かが僕の心を読んでいる。聞こえてきた方に目を見開いて凝視した。話しかけてきた相手は僕が描いた絵の人間だった。それもよく聞くと女性の声と男性の声だった。オレンジ色が女性、緑

色が男性だ。でも、僕が意識的に描き分けたわけではない。絵の世界ではそうなっているのか。それとも、僕がそう思いこんでいるだけか。

僕は、辺りを見回しながら、

「君と君、つまり、君たちは、話せるの？」

パパやママに聞こえないように、顔をテーブルに近づけて小声で尋ねた。

「何を言うんです、神様。あなたが私に命をくれたんじゃないですか」

「そうですよ、神様。私たちはあなたから生まれたんですよ」

「しっ。そんな大きな声じゃ、周りの人に聞こえちゃうよ」

「大丈夫です。あたしの声はあたしを描いてくれた人にしか聞こえないですよ」

「それは私も一緒です。でも、クレヨンで描かれた相手の人の声は聞こえますよ」

僕は二色の人型の絵と二色のクレヨンをじっと見つめる。このクレヨンにそんな力があるなんて不思議だ。

「せっかく、あたしを生んでくれたのに、厚かましいお願いですが、先ほど申しましたように、もう少し大きな家にしてくれませんか」

「それは、私も同じです」

僕は状況がよくわからない、呑み込めないので、気分を落ち着かせるために、傍らの水をひと口飲んだ。そして、二つの絵の人に向かって、

「でも、君たち、一人一人が住むには広すぎるんじゃないの？」

僕は自分の住んでいる家が小さいと馬鹿にされたようで、少しむっとして言った。

「はい。神様のおっしゃるとおり、あたし一人じゃ、十分過ぎるくらい大きい家です。でも、一人での生活は寂しいですから、家族が欲しいんです。そうなると、それなりに広い家が必要なんです」

「それは、私も同じです」

いつも、オレンジ色が先にしゃべり、緑色が続いて同じことをしゃべる。確かに、二人の言うことはもっともだ。一人より二人、二人より三人と、家族が多い方が賑やかでいい。

僕の家はパパとママの三人家族だ。でも、近所にはパパのパパやママ、ママのパパとママ、つまり、おじいちゃんとおばあちゃんが二人ずつ住んでいる。そうなると、全部で七人家族だ。

家族が多いと、お正月にお年玉やちょっとしたお手伝いでお小遣いも二倍、四倍ともらえて嬉しい。でも、勉強しろ、家の手伝いをしろ、などのお小言も何倍にもなって返ってくる。だから、うっとおしい時もある。いいことの裏側には、悪いこともあるんだ。逆に言えば、よくないことの裏側にはいいことがあることになる。

多分、いいことと悪いことは二人三脚でやってくるのに、訪問された方はどちらか一方（多分、その時の気分で、望んでいる方）にしか気がつかないだけなんだろう。この年齢で悟った気分だ。

とにかく、クレヨン人の言い分をもう一度考え直した。確かに、僕の家族にしたって、僕が生まれたときに、パパやママもいたし、おじいちゃんも二人、おばあちゃんも二人揃っていた。僕が望んでいたわけではない。でもそうになっていた。

クレヨン人が望むのならば、望みを叶えてあげてもいい。望みがあるなんて、望みが叶うなんて、素晴らしいことだ。それに、僕もお小遣いをもっと増えて欲しい。それは関係ないか。

「わかったよ。じゃあ、家を大きく描くよ。もちろん大家族用にね」

二人が希望するように、今、描いている家に部屋を付け加えた。ひとつ、ふたつと。

「ありがとうございます。神様」

「ありがとうございます。神様」

クレヨン人の頭と胴体の絵が重なった。二人にしたら、お礼のつもりで頭を下げたのだろうが、絵は二次元なので、僕にはそう見えた。

「お礼を言われるのはありがたいけれど、その神様はやめてくれないか。僕の名前はハヤテと言

うんだ。それで、君たちの名前は？」

「ハヤテ様ですか。あたしの名前は、まだ、ありません。ぜひ、あたしに名前をつけてください」

「ハヤテ様。それは、私も同じです。私にも名前をつけてください」

「その、「様」をつけるのもやめてよ。でも、名前をつけるのか。難しいな」

僕がパッと頭に閃いたのは、コロやミケなど、犬や猫の名前だ。パパやママは、僕に名前をつけただけで、何かに名前をつけるなんて、そんな経験はない。いざ、名前をつけろと言われてもとまどってしまう。

でも、名前をつけることができれば、なんだか自分が相手よりも優位な、つまり、世界を支配している神様になったような気分になる。不思議だ。

さあ、二人の名前は何てつけよう。あれ、さっき、僕は神様なんて呼ばれたくないなんて言っておきながら、やっぱり神様になりたいのかな？

「それじゃあ、名前を付けるよ。あなたはオレンジ色だから、姓がオレンジ、名はオレンジをちじめて、レンジ、合わせて、オレンジ・レンジ。通称、オレンジはどう？それと、君は緑色だから、姓がグリーン、名はグリーンをちじめて、グリ。合わせて、グリーン・グリはどう？」

「そのままじゃあないですか。安易な名前ですね。どこかで、聞いたような音楽バンドがいたような気がします。いえいえ、折角、神様がつけていただいた名前ですから、ありがたく頂戴いたします。それで、家族の方もよろしく願います」

「私も、同じです。どこかで聞いたような音楽の題名ですね。でも、私もこの際文句は言いません。私にも家族を願います」

僕は二人に言われるまま、二人の家族を描いた。オレンジさんには、ご主人と二人の子ども、女の子と男の子だ。グリーン氏には、奥さんと二人の子ども、男の子と女の子だ。

「子どもは、ふたりでいいの？」

「ええ、今のところはふたりでいいです。塾や学校の教育費もかかることですから。これからのことは、夫と考えていきます」

「私も十分です。家のローンだって三十年もあります。退職後の年金だって、今のままの国の状況では本当にもらえるかどうかわかりません。もらえるとしてもわずかでしょう。私も妻と相談します」

いやにリアルな会話だ。画用紙の中の平面の人たちの方が、立体な人の僕よりも人生のことを考えている。パパやママも将来のことを考えているのかなあ？

パパやママを見るが、相変わらず二人は新聞や雑誌を読み耽っている。きっと、あの活字の中に、未来への指針が詰まっているんだ、と僕は納得する。僕がパパやママを眺めていると、テーブルから再び声がした。

「度重なるお願いばかりで、申し訳ありませんが、庭には花と木と芝生が欲しいですね。できれば、自家用車を二台。一台は八人乗りで、あたしたち家族以外にもあたしの父や母、夫の父や母が乗れる広さが欲しいです。もう一台はあたしが仕事や買い物に行くための小さい車、軽自動車です」

何が十分なのかわからないけれど、オレンジさんが頼んできた。慌てたように

「それなら、私も同じようにお願いします」

グリーン氏は何から何までオレンジさんと同じことを要望する。

「そうそう、それに、犬と猫も飼いたいですね。実は、あたしは大の動物好きなんです。子どもの頃、カメを飼っていたんですよ。本当は犬や猫を飼いたかったんですが、父や母が、決して許してくれなかったんです。もちろん、あたしが本や教科書は机の上や本棚に積み重ねたままだったり、服はベッドの上に脱ぎ捨てたままだったり、後片付けができず、また、飽きやすい性格なのを知っていたからでしょう」

なんだか、自分のことを言われているようだ。僕も、今、家でカメを飼っている。名前はカメ吉。やっぱり安易な名前だ。オレンジさんが望むように、僕も犬や猫を飼いたいんだけど、パパやママが許してくれない。

滞りがちなカメの水替えや餌やり、勉強部屋では、床に無造作に置かれた制服やカバン、散らかったマンガの本や食べた後のお菓子の袋などが自分の居場所のように占拠している。僕の所有物が僕を所有している。神様が入れ替わった状態だ。やっぱり、僕には神様は似合わない。

「ふーん、それは残念だったね」

あたかも他人事のように返事するが、心の中は同感だ。

「それで、子どもの頃からの悲願だった、犬や猫を飼いたいです」

「私も、飼いたいです」

それまで黙っていたグリーン氏が会話に割って入った。

「私も子どもの頃から・・・」

「わかった、わかったよ」

僕は、どうせ同じ事の繰り返しだろうから、グリーン氏の言葉を遮って、二人の家の庭に犬と犬小屋の絵を描いた。猫は屋根の上に描き、家の片隅に猫専用の出入り口の扉を描いた。この犬と猫は二人が飼い主でもあり、描いた僕も飼い主でもある。

画用紙の中の犬と猫なら、パパやママに文句を言われる筋合いはない。僕の悲願も叶ったわけだ。一通り、二人が望むもの、僕が少し望むものを描いた。

「ハヤテ神様。私たちオレンジ家だけでは寂しいので、隣近所に他の人の家も描いてくれませんか。何しろ、人は一家族だけでは生きていけませんから」

それはそうだ。僕の家を北側には、同級生の正夫君が住んでいるし、隣には二学年下の義明君が住んでいる。友達が多い方がいい。毎日、一人でサッカーのドリブルやドッジボールの壁当てじゃ、つまらない。

「それは、私も同じです」

グリーン氏も続ける。

僕は二人に言われるまま、隣近所の家やマンション、隣に「こんにちわ」と挨拶に行くための道路、食糧品や洗剤など生活用品を打っているスーパー、電気が通っている電信柱、大人たちにとっても子どもたちにとっても集まりの場所の神社、僕も通っている小学校、雨水が道路に溢れないように流す水路、お米や麦、野菜を育てるための田んぼや畑、子どもたちが鬼ごっこやちょっとしたキャッチボールをするための空き地、散歩やドッジボールや野球、サッカーなど

をするための公園、会社や家族揃って遠くへ遊びに行くための自動車、仕事をする会社のビルなど、画用紙クロスの上に、所狭しと描き続けた。

もちろん、オレンジ色と緑色で、同じ数、同じ形で。ちょうど、僕を中心に、右手がオレンジタウン、左側がグリーンタウンだ。

絵は僕の目の前から、パパやママの食卓の前まで、どんどん広がっていく。でも、相変わらず、パパやママは絵ではなく、漢字ばかりの字や何色にも彩られた写真に魅入っている。オレンジ色や緑色の絵に気がつかない。やっと二人の望む街ができあがった。僕の街にそっくりだ。

「ありがとうございます。これで、あたしたちも人生を楽しく過ごせます。折角、命をいただいたのですから、思う存分生きます」

「同じく、ありがとうございます」

二人は再び体をくの字に曲げた。二度目の礼だ。大人に何度も「ありがとう」って感謝されたのは初めてなので、少し照れる。

だいたい、大人は子どもを自分の所有物のように思って、何から何まで自分の意のままに子どもが動かないと気が済まないらしい。その点、今は、僕が大人になった気分だ。やはり、自分が思うとおりにならないと気がすまないのだろうか？大人や子どもに関係なく、人の本質的な問題なのだろうか？

でも、そんなことばかりでもない。なぜなら、オレンジさんやグリーン氏が喜んでくれるのなら、僕は純粹に、自分の事のように嬉しいからだ。